

静脈業界を牽引するリーダー：斉藤良一

第5回 プロローグ～出会い



本連載をお読みいただいている皆様、こんにちは。白井エコセンター株式会社代表取締役の斉藤良一と申します。私は、前代表取締役白井徹の急逝のため、2023年7月に代表取締役を引き継ぎました。白井グループといえば、前代表の白井徹を思い浮かべていただく方が多いと思います。今回ESJレターにおいて白井グループのお話をさせていただくにあたり、白井美菜のコラムにおいて会社の概略はお話させていただきましたので、私からは「私と白井徹」というテーマで、彼との出会いから事業系部門立ち上げまでの経緯をお話させていただきます。

それは突然訪れました…

2023年6月24日、白井徹の義理のお兄さんから着信があり、「土曜日なのに珍しいな…」と思いながら電話に出ると、「徹くんがサーフィン中に救急車で運ばれたらしい…」「今、現地向かっているのだけど、斉藤くんも現地に来て!」とのことでした…

その言葉に、「これはただ事ではないな」と悟りました。その後のことは、頭が真っ白になり、どうやって現地までたどり着いたのか覚えていません。現地で対面した時、白井徹は笑っているような表情でした。今にも起きてきそうで、「まだ好きなサーフィンをしているつもりなのかな…」と感じたのを、今でも思い出します。

その時の私の感情はぐちゃぐちゃな状態で、悲しみの感情と併せて、なぜか「まだやることがいっぱい残っているだろ!」という怒りの感情が入り混じり、不謹慎ですが怒りの感情が勝っていたことだけ覚えています。ちょうどこの前日に「これからの事業展開、こうしようよ!」と2人で話しあったばかりでした…

この日、白井グループの大黒柱であり、私の40年以上の友人でもあった白井徹を永遠に失いました…

振り返りますと、私と白井徹が出会ったのは1980年、東京の西池袋にあった極真空手の総本部道場でした。

当時、映画「地上最強のカラテ」(1976年公開/配給:松竹・富士映画)・漫画「空手バカ一代」(原作:梶原一騎、作画:つのだじろう[第1部-第3部]、影丸譲也[第4部-第6部])。1971年～1977年まで『週刊少年マガジン』『講談社』にて連載)に感化され、強さへの憧れから、極真空手の総本部道場に入門しました。伝説の「大山倍達総裁に会える!」というミュー



著者
白井エコセンター株式会社
代表取締役社長

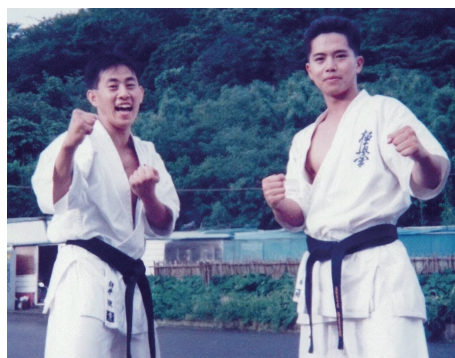
斉藤良一

ちょうどこの年に「アントニオ猪木vs極真空手代表の“熊殺し”ウィリー・ウィリアムスの異種格闘技戦」が開催され、空前の格闘技ブームだった関係で、稽古の度にたくさんの入門者がいて、極真空手も大ブームを迎えていました。しかし、現実には厳しい稽古のためにほとんどが入門してもすぐに辞めていました。

白井徹とは、道場への入門がほぼ同時期で、高校の下校のタイミングで稽古に出ており、よく顔を合わせました。私たちは、性格は正反対でしたが、同世代だったこともあり、意気投合し、よくつるんでいました。2人とも高校生だったので、まだ体が細くて、一般の大人たちに交じった稽古では、手を抜いてもらえる訳ではないので、組手の時間はとてもきつく、怪我が絶えませんでした。毎回、道場に向かう途中にある池袋西口公園を越えるまでは、決意が必要で、何度も引き返すつもりで立ち止まっていました。道場へ向かう途中で白井徹と会えると、そのまま稽古をさぼり、池袋北口のゲームセンターへ向かった日もありました。今思えば「辞めずによく続いたな」と思います。

入門してからは、黒帯(初段)になることが目標になるのですが、白帯→水色帯→黄帯→緑帯→茶帯→黒帯と道のりは果てしなく長く厳しい道のりです。私たちは、昇級審査、昇段審査と常に一緒に受審し、黒帯になるのに共に6年ほど掛かりました。この長い時間を過ごす中で、固い絆が生まれたのだと思います。

当時たびたび白井徹の実家(現在の鹿浜エコオフィスOmoya)で練習をしていたのですが、1階のテラスで組手の練習を始めると、ガラスの扉が近かったので、白井徹のお母様(白井運輸(株)先代社長)に「危ないからやめなさい!」と、よくしかられていたのはよい思い出です。



1987年8月
極真会総本部:強化合宿にて
(左:白井徹、右:斉藤良一)

最近、白井徹の実のお姉様にお会いする機会があり、昔話に花が咲きました。当時、高校生だった我々のことを「2人ともとても可愛かったのよ!」と笑顔で話しているのを聞いて、(白井徹は4人兄弟の末っ子だったので)「やっぱり早すぎだよ…」と、いろいろな想いがあふれてきました。

白井徹との空手絡みの思い出は尽きないので、このあたりで。次稿からはお互いに社会人になってからの話をさせていただこうと思います。

【続く】